

『論語私存』 訳注（九）

水野 実・阿部光麿・大場一央・松野敏之 編

始めに

『論語私存』は王守仁（陽明）の高弟季本（号は彭山。一四八五～一五六三）の手になる『論語』の本格的な注釈書である。この書は『論語』理解に有用であるだけでなく注釈史の上でも注目すべき書である。そののみならず、陽明学理解とその変遷を考察する上でも不可欠な要素を有する。この書の有する様々な意義を鑑み、すでに水野実（防衛大学校名誉教授）を代表として、阿部光麿（早稲田大学講師）、大場一央（早稲田大学講師）、松野敏之（国士舘大学准教授）の三氏とチームを組んで長らく共同でこの書の訳注に取り組んできた。そしてその成果は計八回に亘って『防衛大学校紀要』に掲載してきた。「学而」篇から「泰伯」篇までの計八篇である。

しかし、水野の防衛大学校定年退職に伴い、志半ばにして発表機関を失うことになり、しばし中断の已むなきに至ることになった。がここにきて漸く発表雑誌を『論叢アジアの文化と思想』とすることに決定し、今後、全篇の訳注の完成を目指し、心新たに鋭意努力することとした次第である。改めて江湖の批正を請う所以である。

なお、この研究成果は阿部、大場、松野の三氏と水野との討議によるものである。意見が分かれた際の判断は水野が行い、最終的責任は水野にあること、そして下訳、訂正、まとめ等を担当した大場氏の功績の尽大なることを明記しておく。

水野 実

凡例

- ・ 底本は、北京市国家図書館蔵『四書私存』（明嘉靖二十二年刻本）を用いた。
- ・ 原文において判読出来ない字は□で表記した。
- ・ 書き下しにおいて、『論語』本文における□は「」で示した。
- ・ 書き下しにおいて、季本注における□は、類推できる場合は「」で示し、校異を附した。
- ・ 季本『説理会編』は、清華大学図書館蔵馮繼科刻本（四庫全書存目叢書所収）を用いた。

子罕第九

【一】

子罕言利與命與仁。

利、非財利也。若財利、奚止於罕言哉。蓋言所行皆順利也。如利用安身之利。命、自流行福善者而言。如大德受命之命。仁、自心德渾全、自然能惻隱慈愛而言。如我不欲人加諸我、吾亦欲無加諸人之意。此皆成德之效驗也。學者只當於修己上用功。若言效驗、□未免有計功謀利、希高慕大之心。非入德之實地矣。

〔訓誦〕

子、罕に利と命と仁とを言ふ。

利は、財利に非ず。若し財利なれば、奚ぞ罕に言ふに止まらんや。蓋し行ふ所皆利に順ふを言ふなり。利用安身の利の如し。命は、流行福善する者よりして言ふ。大徳、命を受くの命の如し。仁は、心徳渾全、自然に能く惻隱慈愛するよりして言ふ。我、人の諸を我に加ふるを欲せざるは、吾も亦た諸を人

に加ふること無からんと欲すの意の如し。此れ皆成徳の効験なり。学者只だ当に修己上に於いて功を用ふべし。若し効験を言へば、□未だ功を計り利を謀り、高きを希み大を慕ふの心有るを免れず。入徳の実地に非ず。

【語釈】

○利用安身 『易経』繫辭下伝に「尺蠖せきかくの屈するは、以て信のびんことを求むるなり。竜蛇の蟄するは、以て身を存せんとなり。義を精しくして神に入るは、以て用を致すなり。用を利し身を安んずるは、以て徳を崇くするなり」とある。

○大徳受命 『中庸章句』第17章に「詩に曰く、嘉樂たる君子は、憲憲たる令徳あり。民に宜しく人に宜しく、禄を天に受く。保佑して之れに命じ、天より之れを申ぬ、と。故に大徳の者は必ず命を受く」とある。

○我不欲人加諸我、吾亦欲無加諸人 『論語』公治長・11章に「子貢曰く、我、人の諸を我に加ふるを欲せざるは、我も亦た諸を人に加ふることなからんと欲す。子曰く、賜や、爾の及ぶ所に非ざるなり」とある。

【二】

○達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名。子聞之謂門弟子曰、吾何執。執御乎、執射乎、吾執御矣。

博學、即博學於文之意。無所成名、與易不成乎名義同。此正其所謂大非惜辭也。孔子聞之、恐學者馳心於高遠。故言我亦當執一藝、以成名耳。射御之事、學者所常習、而御爲尤卑。苟能即此而執之、則亦爲學之實地也。而何必求之高遠哉。

〔訓読〕

○達巷の党人曰く、大なるかな孔子、博く學びて名を成す所無し、と。子、之れを聞きて門弟子に謂ひて曰く、吾、何をか執らん。御を執らんか、射を執らんか、吾は御を執らん。

博く學ぶは、即ち博く文に學ぶの意なり。名を成す所無しは、易の名を成さずと義同じ。此れ正に其の所謂大は、惜しむ辭に非ざるなり。孔子之れを聞き、學者の心を高遠に馳せんことを恐る。故に我も亦た当に一芸を執りて以て名を成すべきを言ふのみ。射御の事は、學者の常に習ふ所にして、御は尤も卑しと爲す。苟も能く此れに即きて之れを執れば、則ち亦た學の實地と爲るなり。而るを何ぞ必ずしも之れを高遠に求めんや。

〔語釈〕

○博學於文 『論語』雍也・25章に「子曰く、君子は博く文に學びて、之れを約するに礼を以てすれば、亦た以て畔そむかざるべきか」とある。

○易不成乎名 『易経』乾卦・文言伝に「初九に曰く、潜竜用ふる勿れとは、何の謂ひぞや。子曰く、竜徳にして隠るる者なり。世に易へず、名を成さず、世を遷いれて悶いること無く、是とせられ

されども悶ること無し。樂しめば則ち之れを行ひ、憂へば則ち之れを違^さる。確乎として其れ抜くべからざるは、潜竜なり」とある。

【三】

○子曰、麻冕禮也。今也純儉。吾從衆。拜下禮也。今拜乎上泰也。雖違衆、吾從下。從衆、同俗之儉也。從下、敬君之恭也。

〔訓読〕

○子曰く、麻冕は礼なり。今や純は儉なり。吾は衆に従はん。下に拜するは礼なり。今、上に拜するは泰なり。衆に違ふと雖も、吾は下に従はん。

衆に従ふは、俗に同じくするの儉なり。下に従ふは、君を敬するの恭なり。

【四】

○子絶四。母意、母必、毋固、毋我。

此四者、當其天理之感。何用禁止。然既有四者之名、則恐爲所繫。故以母言。蓋純亦不已之誠、自然警省而絶去之。雖不以母爲無、可也。

〔訓読〕

○子は四を絶つ。意母く、必母く、固母く、我母し。

此の四者は、其の天理に当たたるの感なり。何ぞ禁止を用ひん。然れども、既に四者の名有れば、則ち恐らくは繋くる所と為らん。故に母を以て言ふ。蓋し純にして亦た已まざるの誠は、自然に警省して之れを絶ち去る。母を以て無と為さずと雖も可なり。

〔語釈〕

○何用禁止 『論語集注』子罕・4章に、程子語として「此の母字は、禁止の辞に非ず。聖人は此の四者を絶つ。何ぞ禁止を用ひん」とあり、程子は、聖人は既に四者を絶っているのだから、母は「無」であるとする。四者に天理とのつながりを見出す季本とは、同じ言葉を使っているが、少しく文脈が異なる。この場合「母」は読まないという主張になる。

○不以母爲無可也 『論語集注』子罕・4章に「絶は無きの尽くる者。母は史記に無に作る、是なり」とある。

【五】

○子畏於匡。曰、文王既没、文不在茲乎。天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予何。

陽虎暴匡之說、辯見孔子圖譜論。○文不在茲、蒙文王而言。不必以文爲謙辭。○此與桓魋其如予何意同。

〔訓読〕

○子、匡に畏る。曰く、文王既に没すれども、文、茲に在らざらんや。天の將に斯の文を喪ぼさんとするや、後に死する者、斯の文に與るを得ざるなり。天の未だ斯の文を喪ぼさざるや、匡人、其れ予を如何せん。

陽虎、匡に暴るるの説、孔子凶譜論に辯見す。○文、茲に在らずは、文王を蒙りて言ふ。必ずしも文を以て謙辞と為さず。○此れ桓魋其れ予を如何せんの意と同じ。

〔語釈〕

○辯見孔子圖譜論 『千頃堂書目』卷三に「季本孔孟凶譜三卷」とあり、季本の著した『孔孟凶譜』を指すか。未見。

○桓魋其如予何 『論語集注』述而・22章。

○不必以文爲謙辭 『論語集注』子罕・5章に「道の頭はるる者、之れを文と謂ふ。蓋し礼楽制度の謂ひなり。道と曰はずして文と曰ふは、亦た謙辞なり」とある。

【六】

○大宰問於子貢曰、夫子聖者與、何其多能也。子貢曰、固天縱之、將聖又多能也。子聞之曰、大宰知我乎。我少也賤。故多能鄙事。君子多乎哉、不多也。牢曰、子云、我不試、故藝。

大宰、呉官也。大宰以天資言。故謂孔子爲聖而多能。子貢亦以聖爲天質。但就聖之出衆者言耳。謂聖亦有多能者。而孔子則天縱之。故比他人之聖又多能也。蓋以多能生於縱字矣。將字只從集註作殆解。孔子則以聖人爲精一之名。非由天賦、乃從工夫得之。凡事皆粗迹。故曰、鄙事由少賤而多能、則歷□□成者也。故下文引子云不試、故藝之言、以明之。君子多乎哉、不多也、一以貫之意。謂當專求心體之精一耳。

〔訓詁〕

○大宰、子貢に問ひて曰く、夫子は聖者か、何ぞ其れ多能なるや、と。子貢曰く、固より天、之れを縦にし、將ほんど聖にして又た多能なり、と。子、之れを聞きて曰く、大宰、我を知るか。我少わかきとき賤し。故に鄙事に多能なり。君子は多ならんや。多ならざるなり。牢曰く、子云ふ、我試もちひられず、故に芸あり、と。

大宰は、呉官なり。大宰は天資を以て言ふ。故に孔子を謂ひて聖にして多能と爲す。子貢も亦た聖を以て天質と爲す。但だ聖の衆に出づる者に就いて言ふのみ。聖と謂ふも亦た多能ならざる者有り。而れども孔子は則ち天、之れを縦にす。故に他人の聖に比して又た多能なり。蓋し多能を以て縦字を生ず。將字は只だ集註殆に作るに従ひて解す。孔子は則ち聖人を以て精一の名と爲す。天賦に由るに非ず、乃ち工夫より之れを得たり。凡事は皆粗ほ迹なぬ。故に曰く、鄙事は少きとき賤しきに由りて多能なれば、則ち歴□□成者也、と。故に下文に子云ふ試ひられず、故に芸ありの言を引きて、以て之れを明らかに

す。君子は多ならんや、多ならざるなりは、一以て之れを貫くの意なり。当に専ら心体の精一に求むべきを謂ふのみ。

〔語釈〕

○大宰以天質言 『論語集注』子罕・6章に「大宰は蓋し多能を以て聖と為す」とある。

○將字只從集註作殆解 『論語集注』子罕・6章に「將は殆なり。謙して敢えて知らざるが若くするの辞」とある。

○聖人爲精一之名 『書經』大禹謨に「人心惟れ危うく、道心惟れ微なり。惟れ精、惟れ一、允に厥の中を執れ」とあり、宋明理学では心を論ずる際の常套句となった。

○一以貫之之意 『論語』里仁・15章、同衛靈公・2章。

【七】

○子曰、吾有知乎哉。無知也。有鄙夫、問於我空空如也。我叩其兩端而竭焉。

聖人自言無知、以靜虛之本體、言此心與衆人同者也。故即鄙夫之空空者明之。鄙夫問於我而空空、正見其心之靜虛也。我能動其兩端而使自竭焉。兩端、謂其心是非之兩端也。是非之心人皆有之。我亦安有他知哉。○此章之說、張子主於聖人由問而知。朱子主於聖人教人不可不盡。與此論是非之心人所同有者不同。

〔訓読〕

○子曰く、吾、知ること有らんや。知ること無きなり。鄙夫有り、我に問ふこと空空如たり。我、其の兩端を叩きて竭くす。

聖人自ら知ること無しと言ふは、静虚の本體を以て此の心、衆人と同じ者なるを言ふなり。故に鄙夫の空空たる者に即きて之れを明らかにす。鄙夫の我に問ひて空空たるは、正に其の心の静虚なるを見すなり。我能く其の兩端を動かして自ら竭さしむ。兩端は其の心の是非の兩端を謂ふなり。是非の心は人皆之れ有り。我も亦た安んぞ他知有らんや。○此の章の説、張子は聖人の問ふによりて知るを主とす。朱子は聖人の人を教ふるに尽くさざるべからざるを主とす。此の是非の心は人の同じく有する所の者なるを論ずると同じからず。

〔語釈〕

○張子主於聖人由問而知 『正蒙』中正篇で張載が「洪鐘は未だ嘗て声あらず。扣つに由りて乃ち声あり。聖人は未だ嘗て知あらず。問ふに由りて乃ち知あり」と言ったのを、『二程粹言』で程子が批判し、更に『論語精義』でこの張子語と程子の批判との双方が掲載され、朱熹によって当該章の議論とされたことを受け、季本はこのように言ったようである。

○朱子主於聖人教人不可不盡 『論語集注』子罕・7章に「孔子、謙して己に知識なきを言ふ。但だ其の人に告ぐるに、至愚なりと雖も、敢えて尽くさざるのみ」とある。

【八】

○子曰、鳳鳥不至、河不出圖。吾已矣夫。

明王不出、則無用孔子者。故曰、吾已矣夫。

〔訓読〕

○子曰く、鳳鳥至らず、河、図を出ださず。吾已ぬるかな。

明王出でざれば、則ち孔子を用ふる者無し。故に曰く、吾已ぬるかな、と。

【九】

○子見齊衰者冕衣裳者與瞽者。見之雖少必作、過之必趨。

語孟中重服、但言齊衰、不言斬衰。説見説理會編卷十一。見者、望見之辭。及既見則必作、欲相慰問也。過者、過其所止之處也。必趨者、不欲勞其起居也。

〔訓読〕

○子、齊衰者、冕衣裳者と瞽者とを見る。之れを見れば少しと雖も必ず作ち、之れを過ぐれば必ず趨る。

語孟中、服を重んずるも、但だ齊衰を言ひて、斬衰を言はず。説は説理會編卷十一に見ゆ。見とは、之れを望見するの辭なり。既に見るに及べば則ち必ず作つは、相ひ慰問せんと欲すればなり。過とは、

其の止まる所の処を過ぐるなり。必ず趨るとは、其の起居を勞するを欲せざればなり。

〔語釈〕

○說見說理會編卷十一 『說理會編』卷十一・6条で季本は「喪服は、父の為に斬衰し、母の為に齊衰す。其の制同じからず。而れども、孟子則ち曰く、三年の喪、齊疏の服、飢粥の食は、天子より庶人に達するまで、三代之れを共にす、と。窃かに疑ふらくは、古は通喪すること三年、皆齊疏を以て常と為す。而して衰は胸前に在りて、特だ斬を以て別つのみならん、と。故に中庸に曰く、父母の喪は貴賤なく一なり、と。豈に父は斬を以てし、母は齊を以てするの理あらんや」云々と言ひ、『孟子』を根拠に斬衰、齊衰の区分を否定する。しかし、卷十一を見る限り、『論語』を根拠にこれを否定している箇所は見当たらない。

【十】

○顏淵喟然嘆曰、仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人。博我以文、約我以禮。欲罷不能。既竭吾才。如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已。

高堅前後、嘆道體之無窮也。然可實下手處、只在博文約禮。文顯於事、禮隱於心。禮者、道之歸宿處、而文之所由節也。密於文而不疎博也。要於禮而不亂約也。聖人以此誘人、而使之漸次精進。所謂循循善誘也。顏子爲之盡力、至於欲罷不能、則既時習而悅矣。其所得者、只是此禮在心耳。所立卓爾、禮之立

也。舍禮之外、何由從心。孔子從心所欲不踰矩。矩即禮也。聖人亦不能外矩以從心。而況於學者乎。詳見說理會編卷四。

〔訓誦〕

○顏淵喟然として嘆じて曰く、之れを仰げば弥いよ高く、之れを鑽れば弥いよ堅し。之れを瞻るに前に在れば、忽焉として後に在り。夫子は循循然として善く人を誘ふ。我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす。罷めんと欲すれども能はず。既に吾が才を竭くす。立つ所有りて卓爾たるが如し。之れに従はんと欲すと雖も、由る末なのみ。

高堅前後は、道体の無窮を嘆ずるなり。然れども実に手を下すべき処は、只だ博文約礼に在るのみ。文は事に顕はれ、礼は心に隠る。礼とは、道の帰宿する処にして、文の由りて節する所なり。文に密にして博を疎かにせず。礼を要めて約を乱さず。聖人は此れを以て人を誘ひ、而して之れをして漸次に精進せしむ。所謂循循として善く誘ふなり。顔子は之れが為に力を尽くし、罷めんと欲するも能はざるに至れば、則ち既に時に習ひて悦ぶなり。其の得る所の者は、只だ是れ此の礼の心に在るのみ。立つ所卓爾は、礼の立つなり。礼に舍るの外、何に由りて心に従はん。孔子は心の欲する所に従ひて矩を踰えず。矩は即ち礼なり。聖人も亦た矩を外にして以て心に従ふこと能はず。而るを況んや学者に於いてをや。詳しくは說理會編卷四に見ゆ。

〔語釈〕

○説見説理會編卷四 『説理會編』卷四・14～18条にかけて「博文約礼」という綱目が立てられ、様々に議論が展開されているが、本章の議論に近いものはあっても（14条・17条）、主題が全く同一であると断定できる議論はない。14条・17条は、「矩は礼なり」と言つて、博文約礼と「矩を踰えず」とを結んでいるので、季本はこの辺りを参照して欲しかったものと思われる。

【十一】

○子疾病。子路使門人爲臣。病間曰、久矣哉、由之行詐也。無臣而爲有臣。吾誰欺、欺天□。且予與其死於臣之手也、無寧死於二三子之手乎。且予縱不得大葬、予死於道路乎。

久矣、言其常如此也。死能葬之以禮、不必有臣也。有臣亦虛文耳。

〔訓読〕

○子、疾病なり。子路、門人をして臣爲らしむ。病間に曰く、久しいかな、由の詐を行ふや。臣無くして臣有りと爲す。吾誰をか欺かん、天を欺かん「や」。且つ予、其の其の臣の手に死せんよりは、無むしる二三子の手に死せんか。且つ予縱ひ大葬を得ずとも、予は道路に死せんか。

久しとは、其の常に此くの如きを言ふなり。死は能く之れを葬るに礼を以てし、必ずしも臣有らず。臣有るは亦た虚文のみ。

〔語釈〕

○死能葬之以禮 季本は、『論語』為政・5章「死せるには之れに事ふるに礼を以てし」を引用し、「能」字を付けて強調、「必ずしも臣あらず」に繋げたものと思われる。

【十二】

○子貢曰、有美玉於斯。韞匱而藏諸。求善賈而沽諸。子曰、□之哉。沽之哉。我待賈者也。
此章之義、只在求與待而已。

〔訓読〕

○子貢曰く、斯こに美玉有り。匱とくに韞かくして諸を蔵せんか。善賈を求めて諸を沽らんか。子曰く、之れを「沽らん」かな。之れを沽らんかな。我は賈を待つ者なり。

此の章の義、只だ求むると待つとに在るのみ。

【十三】

○子欲居九夷。或曰、陋。如之何。子曰、君子居之、何陋之有。
觀此語、則浮海之歎、亦非虛發者矣。

〔訓読〕

○子、九夷に居らんと欲す。或ひと曰く、陋なり。之れを如何せん、と。子曰く、君子之れに居れば、何

の陋か之れ有らん。

此の語を觀れば、則ち海に浮かぶの歎も、亦た虚しく発する者に非ざるなり。

〔語釈〕

○浮海之歎 『論語』公冶長・6章に「子曰く、道行われず、桴に乗りて海に浮かばん」とある。

【十四】

○子曰、吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。

雅頌者、樂之歌也。如春秋士大夫賦詩則歌雅、三家者徹則歌雍、皆雅頌之不得其所也。序詩而各歸其所當用則樂正矣。自衛反魯、事見孔子圖譜。

〔訓読〕

○子曰く、吾、衛より魯に反りて、然る後樂正しく、雅頌、各おの其の所を得たり。

雅頌とは、樂の歌なり。春秋の士大夫、詩を賦すときは則ち雅を歌ひ、三家者、徹するときは則ち雍を歌ふが如きは、皆雅頌の其の所を得ざるなり。詩を序して各おの其の当に用ふべき所に歸すれば、則ち樂正し。衛より魯に反るは、事、孔子図譜に見ゆ。

〔語釈〕

○三家者徹則歌雍 『論語』八佾・2章に「三家者、雍を以て徹す。子曰く、相くるは維れ辟公、

天子穆穆たり。奚ぞ三家の堂に取らんや」とあり、『論語私存』八佾・2章の注で季本は「大夫、雍を歌ひ以て徹す。此れ雅頌の其の所を得ざる所以なり」としている。

【十五】

○子曰、出則事公卿、入則事父兄。喪事不敢不勉。不爲酒困。何有於我哉。

事公卿而誠信足以開其明。事父兄而孝友足以□其愛。居喪而哀戚之情雖久不怠。飲酒而恭敬之德雖醉不昏。此非天理純全而曲盡精微者不能也。豈可謂此非聖人之極致哉。何有於我、自覺其難也。

〔訓読〕

○子曰く、出でては則ち公卿に事へ、入りては則ち父兄に事ふ。喪事には敢て勉めずんばあらず。酒の困れと爲らず。何か我に有らんや。

公卿に事へて誠信は以て其の明を開くに足る。父兄に事へて孝友は以て其の愛を□に足る。喪に居りて哀戚の情は久しと雖も怠らず。酒を飲みて恭敬の徳は酔ふと雖も昏まず。此れ天理純全にして曲尽精微なる者に非ざれば能くせざるなり。豈に此れ聖人の極致に非ずと謂ふべけんや。何か我に有らんは、其の難きを自覺すればなり。

〔語釈〕

○豈可謂此非聖人之極致哉 『論語集注』子罕・15章で「説、第七篇に見ゆ」とし、同述而・2章

で「三者は已に聖人の極至に非ず」としている。これに対する季本の批判であると思われる。

【十六】

○子在川上曰、逝者如斯夫。不舍晝夜。

水之流行不息、即是道體也。然須有誠爲之本。此與孟子離婁下篇水哉水哉章義同。集註謂自此以至終篇、皆勉人進學不已之辭。以語意求之亦是如此。

〔訓読〕

○子、川上に在りて曰く、逝く者は斯の如きか。晝夜を舍かず。

水の流行して息まざるは、即ち是れ道体なり。然らば須く誠有りて之れが本と爲るべし。此れ孟子離婁下篇の水哉水哉章の義と同じ。集註、此れより以て終篇に至るまで、皆人に学に進みて已まざること、を勉めしむるの辞なりと謂ふ。語意を以て之れを求むるも亦た是れ此くの如し。

〔語釈〕

○孟子離婁下篇 18章参照。

○集註謂『論語集注』子罕・16章に「愚按ずるに、此れより篇終に至るまで、皆人に学に進みて已まざること、を勉めしむるの辞なり」とある。

【十七】

○子曰、吾未見好徳如好色者也。

此欲學者誠於好徳也。未必爲衛靈公而發。

〔訓読〕

○子曰く、吾未だ徳を好むこと色を好むが如き者を見ず。

此れ學者の徳を好むに誠ならんことを欲す。未だ必ずしも衛靈公の爲にして発せず。

〔語釈〕

○未必爲衛靈公而發 『論語集注』 子罕・17章で「史記に、孔子衛に居るに、靈公、夫人と車を同じくし、孔子をして次乗と爲し、市に招揺して之れを過ぐ。孔子之れを醜む。故に是の言あり、と」という引用をしている。

【十八】

○□曰、譬如爲山。未成一簣、止吾止也。譬如平地。雖□一簣、進吾往也。

集註發得吾字精切。

〔訓読〕

○「子」曰く、譬へば山を爲るが如し。未だ一簣を成さざるも、止むは吾が止むなり。譬へば地を平らか

にするが如し。一簣を「覆す」と雖も、進むは吾が往くなり。

集註、吾字を発し得て精切なり。

〔語釈〕

○集註發得吾字精切 『論語集注』子罕・18章に「蓋し学者自強して息まざれば、前功尽く棄つ。其の止み其の往くこと、皆我在りて人に在らざるなり」とある。

【十九】

○子曰、語之而不惰者、其回也與。

此顔子能請事斯語處也。

〔訓読〕

○子曰く、之れに語けて惰らざる者は、其れ回か。

此れ顔子、能く斯の語を事とするを請ふ処なり。

〔語釈〕

○此顔子能請事斯語處也 『論語』顔淵・1章。

【二十】

○子謂顔淵曰、惜乎。吾見其進也、未見其止也。

集註本前章止吾止、進吾往說。故曰、方進而未已。張橫渠謂、顔子未得聖人之止。則解止字與集註不同。

〔訓詁〕

○子、顔淵に謂ひて曰く、惜しいかな。吾、其の進むを見るも、未だ其の止まるを見ざるなり。

集註、前章の止むは吾が止む、進むは吾が往くの說に本づく。故に曰く、方に進みて未だ已まず、と。張橫渠謂へらく、顔子は未だ聖人の止を得ず、と。則ち止字を解すること集註と同じからず。

〔語釈〕

○集註本前章止吾止、進吾往說 『論語集註』子罕・20章に「進止の二字、説は上章に見ゆ。顔子既に死して、孔子之れを惜しむ。其の方に進みて未だ已まざるを言ふなり」とある。

○張橫渠謂 『正蒙』中正篇に「顔子は学を好んで倦まず。仁と智とを合し、具に聖人を体するも、独り未だ聖人の止に至らざるのみ」「此れ顔子の己に克ちて幾をつまひ研らかにし、必ず其の極を用ひんと欲する所以なり。未だ聖に至らずして已まず。故に仲尼其の進むを賢とす。未だ中を得ずして居らず。故に夫の未だ其の止むを見ざるを惜しむなり」とある。

【二十一】

○子曰、苗而不秀者有矣夫。秀而不實者有矣夫。

此由失於培植灌溉也。

〔訓読〕

○子曰く、苗にして秀でざる者有るかな。秀でて実らざる者有るかな。

此れ培植灌溉を失ふに由る。

【二十二】

○子曰、後生可畏。焉知來者之不如今也。四十五而無聞焉、斯亦不足畏也已。

集註以今爲我之今日。本邢氏疏。無聞、先師謂不聞道。其說近實。

〔訓読〕

○子曰く、後生畏るべし。焉んぞ來者の今に如かざるを知らんや。四十五にして聞くこと無きは、斯れ亦た畏るるに足らざるのみ。

集註は今を以て我の今日と爲す。邢氏の疏に本づく。聞くこと無しは、先師、道を聞かずと謂ふ。其の説実に近し。

〔語釈〕

○集註以今爲我之今日 『論語集注』子罕・22章に「安んぞ其の将来、我の今日に如かざるを知らんや」とある。

○本邢氏疏 『論語注疏』当該章の疏に「年少の人、以て学を積み、徳を成すに足り、誠に畏るべきなるを言ふ。安んぞ將に來らんとする者の道德、我が今日に如かざるを知らんや」とある。

○先師謂不聞道 『伝習録』上卷・105条に「四五十にして聞くなきは、是れ道を聞かざるなり。声聞なきにあらず」とある。

【二十三】

○子曰、法語之言、能無從乎。改之爲貴。異與之言、能無說乎。繹之爲貴。說而不繹、從而不改、吾末如之何也已矣。

法語之語、去聲。謂正以告之事也。異與、謂婉以與之言也。能無從乎、言必從也。能無說乎、言必說也。楊氏謂、語之而不達、拒之而不受、猶之可也。其或喻焉、則尚□幾其能改繹矣。此非謂其必從必說與能無□意不同矣。改繹須是從說者自爲。聖人不能代之也。故曰、吾末如之何也已。如之何、正謂改繹。此言聞善者、當實體於身、不徒不逆於耳可也。

〔訓読〕

○子曰く、法語の言は、能く従ふこと無からんや。之れを改むるを貴しと爲す。異與の言は、能く説ぶこと無からんや。之れを繹ぬるを貴しと爲す。説びて繹ねず、従ひて改めざるは、吾、之れを如何ともすること末きのみ。

法語の語は、去声。正にして以て告ぐるの事を謂ふなり。異與は、婉にして以て与ふるの言を謂ふなり。能く従ふこと無からんやは、必ず従ふを言ふ。能く説ぶこと無からんやは、必ず説ぶを言ふ。楊氏謂へらく、之れに語けて達せず、之れを拒みて受けざるは、猶ほ之れ可なり。其の或ひは喩れば、則ち尚ほ其の能く改め釋ぬるに「庶」幾し、と。此れ其の必ず従ひ必ず説ぶと、能く「説ぶこと」無からんやの意と同じからずと謂ふに非ず。改め釋ぬるは須く是れ従ひ説ぶ者自ら為すべし。聖人、之れに代はること能はず。故に曰く、吾、之れを如何ともすること末きのみ、と。之れを如何は、正に改め釋ぬるを謂ふ。此れ善を聞く者は、当に実に身に体すべく、徒だに耳に逆はざるのみならずして可なりと言ふ。

〔語釈〕

○楊氏謂 『論語集注』子罕・23章に「楊氏曰く、法言は、孟子、王政を行ふを論ずるの類の若き是れなり。異言は、其の貨を好み色を好むを論ずるの類の若き是れなり。之れに語けて達せず、之れを拒みて受けざるは、猶ほ之れ可なり。其れ或ひは喩れば、則ち尚ほ其の能く改め釋ぬるに庶幾し。従ひ且つ説びて、而も改め釋ぬざれば、則ち是れ終に改め釋ぬざるのみ。聖人と雖も其れ之れを如何せんや、と」とある。

〔校異〕

○尚□幾其能改釋 『論語集注』子罕・23章をそのまま引用しているので、これに基づき「尚庶幾

其能改繹」とした。

○能無□ 同様の理由により、「能無説」とした。

【二十四】

○子曰、主忠信、毋友不如己者。過則勿憚改。

説見學而篇。此雖去上二句、而意則盡矣。

〔訓読〕

○子曰く、忠信を主とし、己に如かざる者を友とすること毋かれ。過ちては則ち改むるに憚ること勿かれ。説は學而篇に見ゆ。此れ上二句を去ると雖も、而れども意は則ち尽くす。

〔語釈〕

○説見學而篇 『論語私存』學而・8章参照。

○去上二句 『論語』學而・8章の「君子不重則不威、學則不固」のこと。

【二十五】

○子曰、三軍可奪帥也。匹夫不可奪志也。

帥必志立、然後可以不奪。爲帥者本一匹夫耳。三軍雖衆、而所以主三軍者、固此志也。匹夫之志奪、而

後三軍之帥可奪矣。以見三軍之勇所恃在人、不若匹夫之志在己也。然此借上句、以明下句耳。○南軒張氏曰、志者中有所主也。三軍雖衆、其帥可奪者、資諸人故也。匹夫雖微、其志則不可奪者、存諸己故也。夫使志而可奪、則不得謂之志矣。雖然、此所謂志、謂守其道而不渝。如虞人非其招不往之類是也。若守認私意、而不知徙義、則是失其所主。謂之任意則可耳。非志也。此發志字之義盡矣。

〔訓読〕

○子曰く、三軍も帥を奪ふべきなり。匹夫も志を奪ふべからざるなり。

帥は必ず志立ちて、然る後以て奪はれざるべし。帥と為る者は本と一匹夫のみ。三軍は衆しと雖も、而れども三軍を主る所以の者は、固より此の志なり。匹夫の志奪はれて、而る後三軍の帥奪はるべし。以て三軍の勇の恃む所人に在るは、匹夫の志、己に在るに若かざるを見ず。然らば此れ上句を借りて、以て下句を明らかにするのみ。○南軒張氏曰く、志は中に主る所有るなり。三軍は衆しと雖も、其の帥の奪ふべきは、諸を人に資る故なり。匹夫は微と雖も、其の志は則ち奪ふべからざるは、諸を己に存する故なり。夫れ志をして奪ふべからしむれば、則ち之れを志と謂ふを得ず。然りと雖も、此の所謂志は、其の道を守りて渝はらざるを謂ふ。虞人の其の招きに非ざれば往かずの類の如き是れなり。若し私意を守り認めて、義に徙るを知らざれば、則ち是れ其の主る所を失ふなり。之れを意に任すと謂へば則ち可のみ。志に非ず、と。此れ志字の義を發して尽くせり。

〔語釈〕

○以見三軍之勇所恃在人 『論語集注』子罕・25章に「侯氏曰く、三軍の勇は人に在り。匹夫の志は己に在り。故に帥は奪はるべくして、志は奪はるべからず」とある。

○南軒張氏曰 『論語解』当該章の注。なお、「匹夫雖微、其志則不可奪」は『論語解』では「匹夫雖微、有志則不可奪」となっている。

○虞人非其招 『孟子』滕文公下・1章に「孟子曰く、昔、齊の景公、田す。虞人を招くに旌を以てするも至らず。將に之れを殺さんとす。志士は溝壑に在るを忘れず、勇士は其の元を喪ふを忘れず、と。孔子は奚をか取る。其の招きに非ざれば往かざるを取るなり。其の招きを待たずして往くが如きは何ぞや」とある。

【二十六】

○子曰、衣敝緼袍、與衣狐貉者立而不恥者、其由也與。不伎不求、何用不臧。子路終身誦之。子曰、是道也。□足以臧。

人有恥貧之心、則見富者必不能忘情。故強者必伎、弱者必求。不伎不求亦是道。何用不臧、言自此可以進善。非謂不伎不求而善已足也。子路以不伎不求爲足。故曰、何足以臧。

〔訓読〕

○子曰く、敝れたる緼袍を衣、狐貉を衣る者と立ちて恥じざるは、其れ由なるか。伎せきなはず求むからず、何

を用てか臧よからざらん。子路、終身之れを誦す。子曰く、是れ道なり。「何ぞ」以て臧しとするに足らん。

人に貧を恥ずるの心有れば、則ち富者を見ては必ず忘情すること能はず。故に強者は必ず伎ひ、弱者は必ず求る。伎はず求らざるも亦た是れ道なり。何を用てか臧からざらんは、此れより以て善に進むべきを言ふ。伎はず求らずして善已に足ると謂ふに非ず。子路は伎はず求らざるを以て足ると為す。故に曰く、何ぞ以て臧しとするに足らん、と。

【二十七】

○子曰く、歳寒、然後知松柏之後彫也。

松柏後彫、當求其本。張南軒所謂所守之有素也。

〔訓詁〕

○子曰く、歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るるを知る。

松柏彫むに後るるは、當に其の本を求むべし。張南軒の所謂守る所の素有るなり。

〔語釈〕

○張南軒所謂所守之有素也 『論語解』当該章の注に「力量の淺深は、平時は未だ見易からず。惟だ利害艱難の際に当れば、則ち其の守る所の者を見るべきのみ。人は徒だ其の事に臨むの能くす

る処を見るのみ。而れども其の自ら守るの素あるを知らず。松柏の質は堅剛なり。独り歳寒きの時に於いて、而る後人其の彫むに後るるを知るのみ」とある。

【二十八】

○子曰、知者不惑、仁者不憂、勇者不懼。

此論知仁勇之徳。其無所疑惑憂懼如此。非謂三等人也。

〔訓読〕

○子曰く、知者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず。

此れ知仁勇の徳を論ず。其の疑惑憂懼する所無きこと此くの如し。三等の人を謂ふに非ず。

【二十九】

○子曰、可與共學、未可與適道。可與適道、未可與立。可與立、未可與權。

有志、然後可與共學。心通、然後可以適道。守定、然後可與立。義精、然後可與權。經權、詳見說理會編卷一。

〔訓読〕

○子曰く、与に共に学ぶべし、未だ与に道を適くべからず。与に道を適くべし、未だ与に立つべからず。

与に立つべし、未だ与に権るべからず。

志有りて然る後与に共に学ぶべし。心通じて、然る後以て道を適くべし。守り定まりて、然る後与に立つべし。義精しくして、然る後与に権るべし。経権は、詳しくは説理会編巻一に見ゆ。

〔語釈〕

○經權詳見説理會編卷一 『説理會編』卷一・57条で、季本はまず「道」と「礼」と「権」とがあると説き、その上で、平時に行われるべきものが「礼」であり、非常時に行われるべきものが「権」であるとして、権と礼とを対置する。そして平時・非常時にそれぞれ「礼」と「権」とを使い分けて、はじめて「道」が実現されるとする。この道こそが「経」であつて、それは礼と権とを兼ねたものであり、平時・非常時を問わず、現実を一貫するあり方だとする。しかし、漢儒は道を四角四面に礼を遵守することと考え、適宜現実に対応して効果を挙げるのが権だと考えために、現実的な効果が期待できるならば、何をやってもよいと考えてしまった。これでは孟子の言う「兄の臂をねじって食い物を奪い、隣の家の垣根を越えて処女を掠つて嫁にする」と変わらない。故に経を徹底して学ばねば、権を履き違えてしまう、というようなことを論じている。

【三十】

○唐棣之華、偏其反而、豈不爾思、室是遠而。子曰、未之思也。夫何遠之有。

此借詩言而反之。謂、思在外則室有遠、思在内則□不遠。我欲仁斯仁至矣。何遠之有。

〔訓読〕

○唐棣の華、偏として其れ反せり、豈に爾を思はざらんや、室是れ遠ければなり。子曰く、未だ之れを思はざるなり。夫れ何の遠きことか之れ有らん。

此れ詩の言を借りて之れに反す。謂へらく、思ひ外に在れば則ち室遠きことあり、思ひ内に在れば則ち「室」遠からず。我、仁を欲すれば、斯に仁至らん。何の遠きことか之れ有らん、と。

〔語釈〕

○我欲仁斯仁至矣 『論語』述而・29章。

〔校異〕

○則□不遠 文脈から「則室不遠」と判断した。

論語私存卷九終